

この度は PDF のダウンロードありがとうございました。

最後までよろしく申し上げます。

1) 東京文献センターは無料メールマガジン「新刊・近刊情報」を配信中です。不定期配信ですが、登録しておくだけで本の最新情報等をお送りいたします
内容は、本だけでなく、コンピュータ、料理等多種多彩な内容で、ブログにアクセスする時間のない方にも十分楽しんでいただけます。

配信は下の配信サイトを利用しております。

まぐまぐ！ <http://www.mag2.com/m/0000157851.html>

メルマ http://melma.com/backnumber_195136/

メルモ <http://merumo.ne.jp/00608902.html>

メールマガジンにしか書いていない情報もございます、登録をお願いいたします

2) ツイッターユーザーの方、フォローをお願いします

公式 Twitter <https://twitter.com/TokyoBunken>

3) フェイスブックユーザーの方、フォローをお願いします

公式 facebook <https://www.facebook.com/pub.bunken>

出版・印刷でお悩みの方ご相談は

東京文献センター info@tokyone.com 電話・FAX 042-328-3856

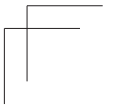
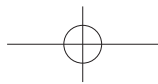
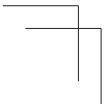
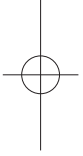
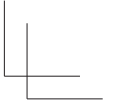
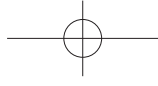
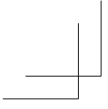
公式サイト <http://www.tokyone.com/tbs/index.htm>

出版目録 <http://www.tokyone.com/tbs/pdf/mokuroku201312.pdf>

敦煌壁面 物語

釈迦の前世・誕生・
悟り・涅槃

聶 鋒【編著】
筒井文子【編・訳】
梁雲祥【監修】



まえがき

聶 鋒

現在の敦煌市は中国の西北部の内陸、河西回廊の西端にあり、甘肅省と青海省と新疆ウイグル自治区につながる場所にある。市の南に祁連山、北に馬鬃山、東と西はゴビ砂漠で、南と北が高く中間は低く西から北東にかけて傾斜した盆地である。オアシスの面積はわずか千四百平方メートルしかなく、典型的なゴビのオアシス地域である。

敦煌莫高窟は敦煌市の東南の二十五キロのところに位置している。その洞窟は鳴砂山の東麓の懸崖に掘られ、前には宕泉らうせんが流れ東には三危山が横たわり宕泉河と対峙している。その宕泉河の水があるからこそ、莫高窟が存在できた。その周りは荒れ果てた砂漠で、河の流域の小さいオアシスが砂漠を引き立たせていた。河の水の存在が懸崖の上と下をまったく違った景色にした。つまり、上は黄色い砂漠だが、下は緑色の木が生え、きれいな泉が流れていた。グレー色の懸崖に入り混じっている石窟の群は、華やかで緑の木の中に隠されていた。

紀元三六六年に（中国の前秦建元二年）、楽僂らくろうという僧侶があちこち遊走して敦煌に来た時、

夕日が無限の砂漠に沈んでいくのを見た。彼が頭を上げると、向かいの三危山に金色の光が輝いていて、たくさんの仏がその金色の光から現れてきた。楽尊はその奇妙な景色によって眩惑した。彼はここが本当に聖地だと思い、この地に初めて洞窟を掘った。

こうして敦煌莫高窟は楽尊が初めて洞窟を一つ掘り、また法良禪師が東側から来てもう一つの洞窟を掘り、その後、北魏晩期の瓜州刺史としての東陽王の元栄と、北周時代（紀元五世紀前期）の建平公の于義が、また洞窟を掘って仏像を作ることを引き続き提唱したことにより発展した。それから、隋、唐、宋、西夏、元の時代を経て、最も盛んな時に千窟程洞窟があったが、今残されているのは四百九十二窟である。たくさんのお窟は後の時代の再建でもともの様子がもう分からなくなり、時が経つにつれて倒れたものや壊れたものもあり、莫高窟の創建期の洞窟はもう見つからなくなった。例えば、楽尊の作った洞窟や司空索靖の字を書いた仙岩寺は、どこにあるかも分からなくも存在していないかもしれない。しかし、敦煌莫高窟の芸術的な風采は残っていて、千年余り経た今も我々に多様な様式とさまざまな姿で、中国と西域との政治、経済、文化、芸術の交流を歴史的な絵巻で伝えている。これは人類文明史の優れた成果で、中国古代の人民の偉大な創造である。

敦煌莫高窟は十六国時代から創建され、十一の時代を経て徐々に「大乘」仏教の各時期と各流派の經典から取られた壁画や彩像が出現した。今保存されている四百九十二の石窟の中には、仏

教の経、律、論、史の大部分の内容と関わるものがあり、世界で割合に完備され保存されている
仏教の美術館と仏像の洞窟を形成した。これらの作品の題材と内容は仏教経典のほか古代の絵
の歴史や筆跡などからも来たものだが、さらに多くのものは本にも記載されていないもので
なおさら珍しいだろう。この巨大な欠文宝典は、たくさんの方の敦煌学の学術努力と研究を経て、
すでに世界でも注目された成果を遂げている。

我々は敦煌の壁画物語を鑑賞したり、認識したり、理解したり、研究したりするときに、これ
が多くの方の仏教文献資料の図像化されたもので、当時の仏教思想と仏教教義を宣揚するために出来
たものだと認識しなければならない。それと同時に、民間に流行していた美しい伝説や物語の仏
教化と図像化でもあるので、その時代の人々の思想や感情や生活に対する願いなどを体験するこ
とができるだろう。

(要約)

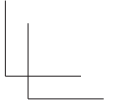
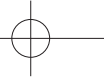
『敦煌壁画物語』 序文

「敦煌」——この言葉の響きから日本人は何を連想するだろうか。

喜多郎の音楽が流れる中、ラクダに乗った隊商が夕陽を背にして砂漠をゆっくりと進む光景、おそらく多くの人が思い浮かべるのは、そうしたエキゾチックな風光絵巻であろう。かつてNHK特集『シルクロード』の映像で見た鮮烈な光景である。

ひと昔前まではテレビや映画で擬似経験することしかできなかった西域の都市も、今や中国観光の目玉の一つとされる人気スポットとなった。かの地を訪れる観光客は、周囲の壮大な自然に圧倒され、そこで営まれてきた人々の悠久の歴史に思いを馳せることであろう。

しかしながら、敦煌が中華民族にとって遺恨の地でもあることを知る者は、おそらく多くないであろう。敦煌が一躍世界の注目を浴びたのは、一九〇〇年、いわゆる敦煌文書の発見によってである。当時は、まだ清王朝の時代であった。莫高窟にいた道士が、偶然、壁の中の空間に大量の写本が蔵されているのを発見した。道士にはこの文献の価値がわからず、発見の報告を受けた地方の役所もまた然るべき保護施策を行わなかった。

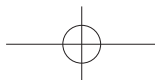
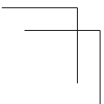
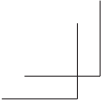
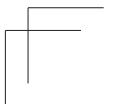


そこへやってきたのが欧米諸国の探検隊である。はじめに駆けつけたのは、英国の探検家スタインであった。一九〇七年、スタインはかの道士にわずかな金を握らせ、数千点に及ぶ経典を引き取ってロンドンへ運んだ。翌年、続いてやってきたのがフランスのペリオである。ペリオは、スタインが積み残した文献の中からさらに数千点を買収取ってパリへ持ち帰った。これらの文献は、のちにそれぞれ大英博物館とフランス国立図書館に所蔵されることになった。その後も、學術目的という名目の略奪が相次いだ。日本の大谷探検隊もその中に含まれる。一九二四年のアメリカのウォーナー探検隊に至っては、剝離剤を用いて壁画を剥ぎ取って持ち去った。

北京の円明園と並んで、清末、弱体化した中華王朝が列強諸国から受けた屈辱を象徴する地が、ほかならぬ敦煌なのである。

このたび筒井文子氏が、『敦煌壁画物語』を翻訳刊行することになった。わたしと筒井氏とのご縁は、同氏の慶應義塾大学卒業論文「干宝『搜神記』に見える死生観について」(二〇〇八年度)の指導をわたしが担当させていただいたことにある。

筒井氏は家庭の主婦である。翻訳の目的は、学術業績云々のためではなく、同氏が純粹に仏教説話に興味を抱き、もっと深くこの世界を探求してみたいと志したことにある。筒井氏の旺盛な知的好奇心と対象に向かう情熱が、本書においてきわめて流暢で明快な訳文として結実している。専門の学者による往々にしてたどたどしい翻訳を遙かに凌駕する質の高い訳書として完成したこ



とを喜び、心より敬意を表したい。

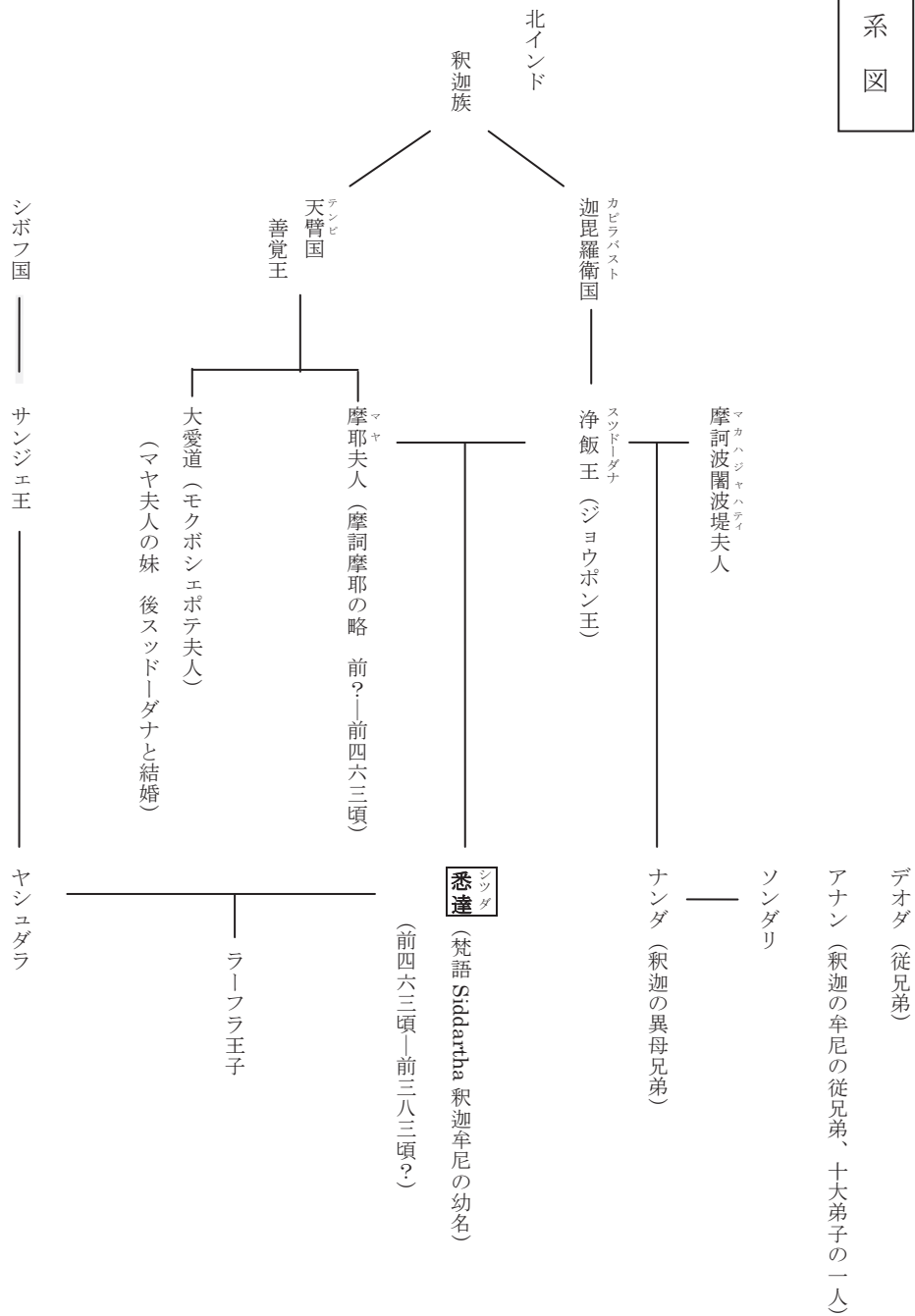
本書は、敦煌学の参考資料として価値が高いばかりでなく、一般読者にとっても民話・神話の類として十分に楽しめる書物である。

本書がわが国で多くの読者を獲得し、日中文化交流の一端を担う心の架け橋となることを祈って、序に代えさせていただきます。

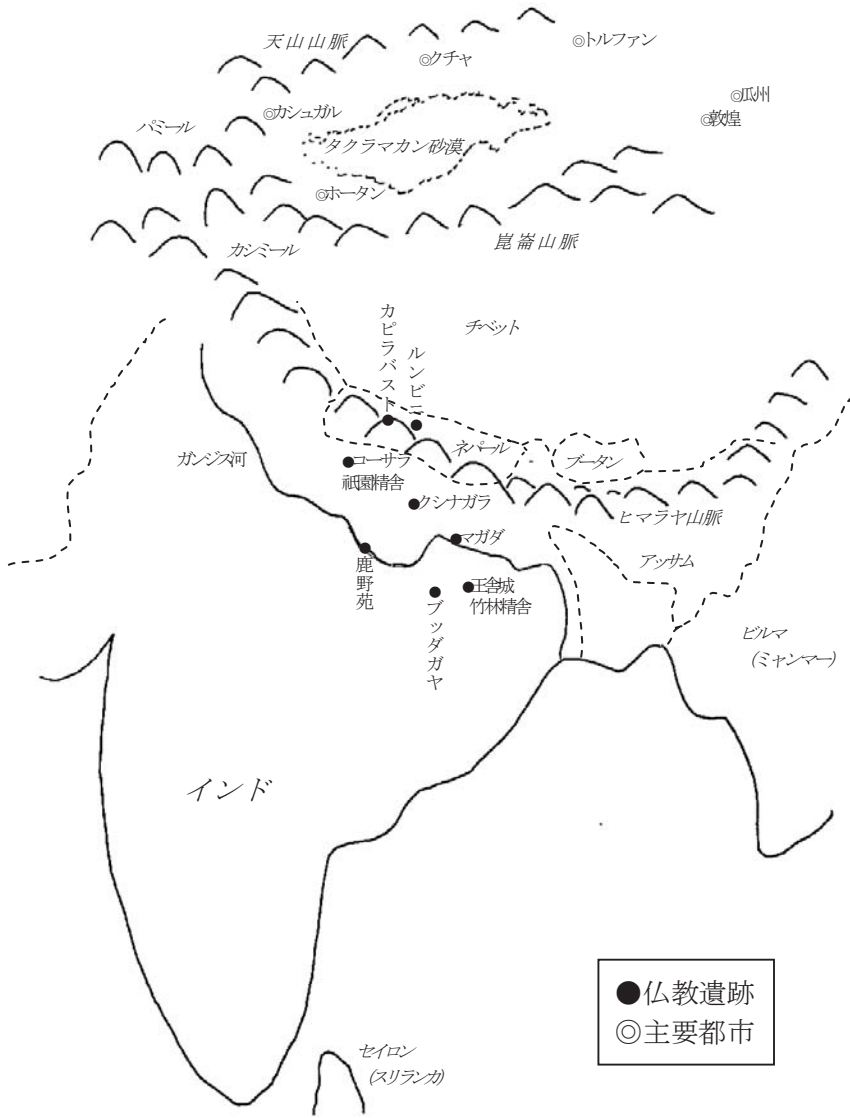
平成二十三年七月十五日

慶應義塾大学教授 八木章好

系
図



略地図



目次

まえがき 3

『敦煌壁画物語』序文 6

系 図 9

略地図 10

I 仏伝物語 15

1 シツダ太子が象に乗って胎に入る 16

2 シツダ太子が木の下で誕生 18

3 シツダ太子が武芸の試合で結婚 22

4 四門に出かけて人間の苦難を体験する 29

5 木の下で耕地を見て深夜に城を抜け出す 37

6 魔女を降伏させ魔軍の侵攻を誘う 42

II 本生物語 63

- 7 仏法の伝播と火竜の降伏 47
- 8 釈迦牟尼が六師を降伏させる 52
- 9 釈迦牟尼の涅槃 56
- 10 虎に命を捧げたサッタ太子 64
- 11 九色の鹿の物語 69
- 12 スダナ太子が国宝の象を与える 73
- 13 シビ王が自分の肉を切つて鳩を救う 84
- 14 センジの孝心が天上の神様を感動させる 89
- 15 善友太子が海に出て如意宝珠を求める 97
- 16 一角仙人が仙女に会つて神通力を失う 111
- 17 スシャテー王子が体の肉を切つて両親に捧げる 118
- 18 快目王が自分の目を人に施す 127
- 19 体に千の穴を抉つて千の燈を灯す 135
- 20 体に千の釘を打つて命を捨て仏法を求める 138

33 賢いピシヤリの因縁の物語 229

32 「無惱^{むなう}み」が指飾^{ゆびかざり}りで仏になる 222

31 アジャセ太子が父親の王様を軟禁する 217

30 シヤリホツとロウドシヤの戦い 208

29 海の神が賢い水夫を困らせる 202

28 象護と金象の物語 197

27 鹿母^{ろくも}夫人が蓮の花を生む 191

26 タンニチと端正王 178

IV 経変物語 177

25 ナンダが妻と別れて修道して仏になる 170

24 スマテイが仏を呼んだ因縁 161

23 小沙彌が命より仏教の戒律を大切にす 153

22 五百人の盗賊が仏になる 149

21 ミミョウ尼の物語 142

III 因縁物語 141

34	ユドラが皮や骨や血で仏法を求める	242
35	醜いシュウがハンサムなストラサンに変わる	244
36	ポシヤラが醜い女から美人に変わる	256
37	サンダンネと五百人の乞食	263
38	斑足王が悪から善になる	269
39	蓋世王が河を返還して敵と和解する	277
40	フナキが徳を以って恩返しする	284
41	華天が仏門に帰依した物語	295
42	ゴウカダが修道を志す	300
43	金天と金明の因縁の物語	308
	出典と窟番号	313
	編集あとがき	319
	おわりに	320

I

仏伝物語

仏伝物語は釈迦牟尼の入胎から出生、成長、出家、苦修、悟道、降魔、成仏、涅槃までの生涯を描くものと、釈迦牟尼の生涯のある一事跡、乗象入胎、四門出遊、夜半踰城、降魔、鹿野苑説法、涅槃等から描くものがある。

「7 仏法の伝播と火竜の降伏」は釈迦牟尼が仏になって初めて鹿野苑で行った説法である。

「8 釈迦牟尼が六師を降伏させる」は経変画の仏伝物語である。

1 シツダ太子が象に乗って胎^{たい}に入る

伝説によると、カピラバスト国²のストドーダナ王はとてもきれいで優しい王妃³のマヤ夫人を愛していた。

ある日、マヤ夫人がお風呂に入って、香を焚^たき染^めた新しい衣服に着替えてぼんやりと横たわって寝ていると、夢の中に突然空から一頭の白い象がゆつくりやってきた。あたりは明るく輝き、音楽が盛んに奏でられ、天女たちが花を散華したり香を焚いたりして、賑やかで楽しそうな雰囲気⁴に満ちていた。白い象がマヤ夫人の傍にやって来て、そつと優しくマヤ夫人の体に触れた。マヤ夫人はすぐ天上の気が体の中に入ったのを感じた。白い象は急に消えてしまい、周りはまた静かになった。

マヤ夫人は夢から目覚め、夢の内容をストドーダナ王に話した。ストドーダナ王とマヤ夫人は不吉な兆候だと思い、恐ろしくなつてすぐに運命を予言する占い師を宮殿に呼んで夢の内容を解釈させた。

マヤ夫人の夢の話とストドーダナ王の恐れを聞いた後、占い師は「この夢は吉祥のしるしでとても目出度く、天上の神様が夫人の胎に降りたことを表しています。夫人はもう孕^は

注1 胎^{たい}
母体の子の宿るところ。

注2 カピラバスト国
古代インドの一種族。
釈尊はこの釈迦族に属していた。

注3 妃
后（第一夫人）に次ぐ位にある者。

注4 飛行王
「輪廻聖王」とも言う。
古代インドの神話の中の「聖王」で手に輪を持っているのでこの名前がついた。王様になつてから神様から輪をもらつて四方を降伏させた。彼は飛

んでいます。時が満ちると、人々の輪廻転生を助け、四方の鬼を抑えられる飛行王⁴が生まれます。そして、飛行王が大人になると家を離れて修行の道を極め、最後に自覚⁵、覚他⁶、覚行⁷を持った完璧な仏祖になって世の中の人々を苦界から救い出します」と言った。すると、スッドーダナ王とマヤ夫人はほっとして、恐れから嬉しさに変わり、太子の誕生を安心して待った。

ぶことができるので「飛行王」と呼ばれた。

注 5 自覚
自分で苦しい修行をして悟ること。

注 6 覚他
生きとし生けるものに悟らせること。

注 7 覚行
完全に悟ることができること。仏教では一般の人は自覚・覚他・覚行の三覚が不完全である。菩薩の三覚は少し不完全である。仏陀だけが三覚を完全に備えている。